原作 老舎 脚本 梅阡 訳注 大山 潔

戯曲 駱駝祥子

〈東方書店、二〇一五年三月、五一八頁〉

篤実そのもののような生前の佇まいを思うほどに、老舎の悲惨極まりない最期には哀惜の情を禁じえない。時に、文学は人の命を奪うことすらある。

一九六六年の文化大革命の発動を知った時、いや、その前奏として呉晗らに対し繰り返し行われた執拗な攻撃を目の当たりにすれば、さしもの老舎も老舎なりの覚悟を持ったはずだ。それはまた『老張的哲学』『趙子曰』『猫城記』『離婚』『牛天賜伝』『龍鬚溝』『茶館』『鼓書芸人』『四世同堂』、そしてもちろん『駱駝祥子』など、社会の下層で懸命に生きる庶民の生活ぶり――貧しくも屈託なく、時に弱く時に勁く、残酷でありながら底抜けに明るく優しく――を好んで克明に描き続けた老舎であればこそ、である。彼は、生きる時代を間違えたのかもしれない。

半世紀ほどの昔、中国語を学んで数年が過ぎた頃である。留学先の香港で北京人の先生と二人で読んだ『龍鬚溝』が、私にとって初の〝老舎体験〟だった。先生が声を出して読んでくれる会話の部分――惚れ惚れするような京片子（ぺきんべん）の響きは、衝撃だった。それまで日本で学んでいた中国語とは、余りにも違った。いや違い過ぎたのだ。

以来、老舎の作品を集め、声を出して読むことに努めてきたが、やはり音感の鈍さは如何ともし難い。そこで小説からの京片子学習は潔く断念し、小説を横目で見ながら、映画化、或いは舞台化された彼の主要作品を見ることにした。だが、困ったことに粗筋は判るが、スクリーンや舞台で〝老舎の分身〟が躍動しはじめるや、彼らの口を突く台詞が聞き取れない。流暢極まりない京片子の響きに心の高鳴りは抑えられないが、応酬される会話を漢字に置き換えることができない。予め小説を読んでいるから会話の意味は分かる。意味が解るが、言葉が判らない。隔靴掻痒。我が中国語の進歩のなさに呆れかえるばかり。

そこで、本書の登場となる。

『駱駝祥子』の舞台で使われた脚本にピンインが振られ、詳細な脚注に加え、当時の庶民生活を容易に想像させる写真やイラストが加えられている。しかもCDながら実際の舞台を味わうことができるのだから嬉しいかぎり。

手持ちのパソコンにCDをセットし、やおら本書を開けば、目の前にはたちどころに老舎の豊饒な世界が展がってくる。生きた異文化――ここでいう文化とは《生き方》《生きる姿》を意味するが――に接しながら中国語が学べる。これ以上の贅沢はないだろう。

ついでながら、小説、映画、戯曲、京劇――それぞれの『駱駝祥子』を見比べ聞き較べることをお勧めしたい。因みに京劇『駱駝祥子』の幕近く、祥子は絶望の声をあげる。「この世のどこに道理があろう。……なにもかもが嘘っぱちだ」。老舎は……哀しい。

（樋泉克夫）